The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中古和文における会話文と地の文の境界
Author(s)	黒木, 邦彦; 藤本, 真理子; 清田, 朗裕 他
Citation	語文. 2008, 91, p. 60-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中古和文における会話文と地の文の境界

黒木　邦彦　藤本真理子
清田　朗裕　森　勇太

一　はじめに

話しことばのテクストは、話し手と聞き手が順次交替する「会話」と、両者が固定的な「語り」に二分される（Dahl 1985、工藤一九九五参照）[1]。物語や小説においては、会話文／地の文の別が、会話／語りの別に対応すると考えてよい[2]。

会話文と地の文は、作中人物の発話であるか否かによっても区別される。宮坂（一九五五）は、両者を次のように定義する。

会話文…表現者がその距離を「ゼロ」にし、登場人物自身となって、その話し合いや考えている内容・心情のあり方を直接的に表白したもの　（宮坂一九五五、一四頁）

地の文…表現者がその特定の構想［・・・］を、時間の流れに従って線条的にくりひろげてゆく部分　（同上）

以上のことをまとめると、次のようになる。

（一）

	テクスト	視点
会話文	会話（相互的）	作中人物
地の文	語り（一方的）	語り手（作者？）

二　会話文の標識

前節で確認したとおり、会話文と地の文は、テクストとしての類型が異なる。近・現代の小説などはその違いに意識的で、両者の境界を記号（たとえば「　」）によって標示する。ところが、中古の物語や日記（以下「中古和文」）には、そのような記号が見られない。そのため、『岷江入楚』などの中世の注釈書においては、会話文と地の文を区別する目的から、

（一）　いつくにおはしますそ　弄うつせみの詞云々　此義非也

小君は源の御前よりかへりてうつせみにいつくにおはしますそとゝふ声也

こゝにそしたる　花小君かいらへ也　是又非也
弄の義と同し　是はうつせみの返答　まらうとはね給ぬるかと源の事を御前よりかへりたれは小君にとふ詞也　（岷江入楚、二、箒木、一八七頁）

のような作業がおこなわれている。読解の精度を上げるため、当時からすでに、両者を区別する必要性があったと考えられる。

阪倉（一九五九）は、中古和文の会話文の前後に、次のような形式が現れると指摘する。これらを目印とすれば、会話文の識別は容易である。

十八世紀以前のヨーロッパ文においてもそうであったように、会話文を表示する引用符は、物語の文章などには、もちろん、まだ発達してはいない。しかし、これにかわるものとして、この種の文章には、

いはく……といふ。いふやう……といふ。いひけるは……といふ。いはく……と。いはく……とて、いふやう……とて、いふ……とて、いはく……。いふやう……。いふ……。……といふ。……とあり。

というような語句が、会話文［・・・］の前後、または前ないし後におかれることが多い。［・・・］後述のごとく間接話法的なものとの区別、ないしは、実際の発話にいたらずして、単に心中のおもいをあらわすにすぎない「心話」というべきものとの区別には、微妙な問題がないわけではないが、一往これらを目じるしにして会話文をひろいだすことは可能である。

（阪倉一九五九、一九六頁）

三　問題の所在

『新日本古典文学大系』（岩波書店）や『新編日本古典文学全集』（小学館）なども、阪倉が挙げるような形式を目印として、会話文を「　」で括っている。しかし、一〇世紀半ば以降の中古和文には、a）（三）のように、会話文の始まりが不明な例（傍線部のどこからが源氏の発話か、正確にはわからない）[3]、b）（四）のように、話し手の交替を特に標示しない例（「φ」は言語形式がないことを示す）、c）（五）のように、同一人物の発話を「―と」で続ける例が少なくない。

（三）［源氏は］後辺の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなう煙りわたれるほど、絵にいとよくも似たるかな。かかるところに住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば［・・・］　（源、若紫、一、二〇二頁）

（四）〔女房a〕「いといたうまめだちて、まだきにやむごとなきよすが定まりたまへるこそ、さうざうしかめれ」。φ〔女房b〕「されど、さるべき隈には、よくこそ隠れ歩きたまふなれ」など言ふにも［・・・］　（源、帚木、一、九四～九五頁）

（五）〔少将〕「［・・・］らうたうなほおぼえば、ここに迎へてん」と、〔少将〕「さらずは、あなかまとてもやみな

んかし」とのたまへば［・・・］（落、第一、九頁）

（三）～（五）からわかるように、中古和文の会話文と地の文の境界は、必ずしも明瞭ではない（阪倉一九五九、同一九七五、池田二〇〇二も参照）[4]。本稿では、会話文の前後の形式を調査・分析し（四節）、中古和文における会話文と地の文の境界について考察する（五節）。基本的な枠組みは、黒木ほか（二〇〇八）と同様である。調査文献は次のとおり（傍線部は以下の本文中での略称。出典は先頭一字のみで示す）。

『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』『和泉式部日記』『源氏物語』『夜の寝覚』『とりかへばや物語』[5]

四　調査・分析

四・一　通達動詞の位置

『竹取』には、会話文の前に通達動詞（および、それに由来する「言はく」や「言ふやう」など）をとる例が多い（波線部のように、会話文の後の通達動詞と重複する点も注目される）。

（六）　帝聞こしめして、内侍中臣のふさ子にのたまふ、「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、罷りて見て参れ」とのたまふ。（竹、五六頁）

（七）　翁、皇子に申すやう、「いかなるところにか、この木はさぶらひけむ。あやしく、うるはしく、めでたき物にも」と申す。（竹、三一頁）

しかし、『竹取』を離れると、会話文の前の通達動詞が、むしろ希有な存在であることに気づく。一〇世紀後半の成立とされる『うつほ』や『落窪』からは、少量ながらも、

（八）　侍従、あて宮の御方におはして、かく聞こえたまふ。「『池水に　玉藻沈むは　鳰鳥の　思ひあまれる　涙なりけり』とは御覧ずや」と聞こえたまへば［・・・］（う、藤原の君、一五〇頁）

（九）　右大臣のたまはく、「子の生まれたるに、祖父、父、よろこびをする、かしこき子なり」と申したまふ。（落、第二、一七三頁）

のような例を拾い出すことができる。しかし、一一世紀以降の成立とされる作品には、こうした例がほとんど見当たらない[6]。『竹取』の会話文一九三例のうち、通達動詞が前に来るのは、三八％弱の七三例に上る。この数値は突出しており、次点の『うつほ』ですら一〇％に満たない。具体的には次のようである[7]。

（一〇）

	会話文	前に通達	
竹取	一九三	七四	（三八％強）
うつほ	八三二	八三	（一〇％弱）
落窪	一一四一	二八	（二％強）
和泉式部	八〇	二	（三％弱）
源氏	一二〇四	四	（一％弱）
寝覚	五九四	三	（一％弱）
とりかへ	二四一	一	（一％弱）

四・二　主語（会話文の話し手）の位置

会話文の前に通達動詞が現れる例は、大抵その主語（会話文の話し手）を明示する（なお、基本語順に従って、主語が通達動詞に先行するのは言うまでもない）。

（一一）　翁答ふ、「定かに作らせたるものと聞きつれば、返さむことといと易し」とうなづきをり。　（竹、六六頁）

（一二）　明けぬれば、帯刀に衛門が言ふ、「しかじかのことあるべかなるを、心憂くも言はぬにこそ。遂に隠れあるべきことかは」と言ひければ［・・・］（落、巻二、一六三頁）

（一一）（一二）のような例の量的分布は、次のとおり（例数が極端に少ない『和泉式部』以下は省略）。

（一三）

	前に通達		主語あり	
竹取	七三		六四	（八八％弱）
うつほ	八三		五七	（六九％弱）
落窪	二八		二一	（七五％　）

『竹取』などには、会話文の前に通達動詞が現れ、かつ、その主語を明示する（つまり、会話文に先行する地の文が、［主語―述語］という構造をとる）例が一定数見出される。会話文の前の通達動詞（「言はく」や「言ふやう」なども含めて）は、述語としての機能を有しているので、単なる会話文の始まりの標識という見方は、一面的に過ぎる。

四・三　成分なし

会話文の前後に、通達動詞や主語はおろか、補語や副詞（以下、これらをまとめて「成分」と呼ぶ。なお、副詞節や条件節は成分に含めない）すら現れない例も少なくない。

（一四）　［左大臣が］泣きたまひぬ。φ（源氏）「いと浅はかなる人々の歎きにもはべるなるかな。［・・・］今御覧じてむ」とて出でたまふを、大臣見送りきこえたまひて［・・・］　（源、葵、二、六四頁）

（一五）　蔵人の主うち笑ひて、「みづからのために多くしはべれども、ことにひとなむ愛ではべらぬ」φ。（う、祭の使ひ、四八五頁）

（一六）　［尚侍が］いといみじく清らにて問はせたまふに、［使いは］いとかたじけなくなりて、「宇治のわたりにおはしますとぞ承る」と。φ（尚侍）「宇治のいづくのほどぞ」φ。　（と、巻三、二五〇頁）

四・三・一　会話文の前

（一四）のように、会話文の前に成分がない例は、『竹取』『うつほ』以外の作品に多い。この点で、四・一節において確認した、通達動詞の分布とは対照的である。

（一七）

	会話文	前なし	
竹取	一九三	二八	（一五％弱）
うつほ	八三二	一四〇	（一七％弱）

落窪	一一四一	四九七	（四四％弱）
和泉式部	八〇	七〇	（八八％弱）
源氏	一二〇四	六一一	（五一％弱）
寝覚	五九四	二四一	（四一％弱）
とりかへ	二四一	七七	（三二％弱）

四・三・二　会話文の後

（一五）のように、会話文の後に成分がない例は、『うつほ』に多い。『和泉式部』や『源氏』など、会話文の前に成分のない例が比較的多い作品においては、ほとんどの場合、会話文の後に何らかの成分が現れる。

（一八）

	会話文	後なし	
竹取	一九三	一五	（八％弱）
うつほ	八三二	三三〇	（四〇％弱）
落窪	一一四一	五〇	（四％強）
和泉式部	八〇	一	（一％強）
源氏	一二〇四	一六	（一％強）
寝覚	五九四	二一	（四％弱）
とりかへ	二四一	二	（一％弱）

四・四　引用標識と動詞の接続

「―と」や「―など」といった引用標識と動詞[8]の間に、主語、補語、副詞などを挟むことがままある。

（一九）〔少将〕「これ参れ」と女君に参りたまへど、恥ぢて参らず。　（落、巻一、五〇頁）

（二〇）〔式部丞〕「さて、いと久しく罷らざりしに［・・・］さすがに口疾くなどは侍りき」としづしづと申せば［・・・］　（源、帚木、一、八八頁）

引用標識と動詞が直接しない（一九）（二〇）のような例は、一一世紀以降の成立とされる作品に多い。量的分布を次に示す（％は非直接／直接の値）。

（二一）

	直接	非直接	
竹取	一四七	一〇	（七％弱）
うつほ	三三一	二一	（六％強）
落窪	七六八	八八	（一一％強）
和泉式部	五二	一一	（二一％強）
源氏	七八六	一七三	（二二％強）
寝覚	三五五	一三五	（三八％強）
とりかへ	一五三	三八	（二五％弱）

五　会話文と地の文の境界

五・一　境界が明確な類型

四・二節で確認したとおり、『竹取』には、会話文の前に通達動詞が現れ、かつ、その主語を明示する例が多い。そのような例は会話文の後が簡素で、波線部のように、主語、補語、副詞などを挟まず（四・四節参照）、引用標識＋通達動詞となるものが大

半を占める。

（二二）　帝聞こし召して、内侍中臣のふさ子にのたまふ、「『多くの人の身をいたづらになして逢はざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞ』と、罷りて見て参れ」とのたまふ。

（竹、五六頁）

（二二）のような例は『うつほ』にも見られるが、この作品に特徴的なのは、会話文の後に成分が現れない、次のような例である（四・三・二節参照）。

（二三）　大臣内に参りたまひて、「などか、涼みには出でたまはざりつる。［・・・］闇の夜の錦とか言ふやうもなむ」φ。

（う、祭の使ひ、四六九頁）

ただし、『竹取』にせよ『うつほ』にせよ、地の文が会話文の前で完結する点では等しい。会話文も、文末の述語が終止法（終止形、および、係助詞に呼応した連体形・已然形）だったり、終助詞を接続させたりするので、地の文との境界が明瞭である。

五・二　境界が不明確な類型

一方、『源氏』以降の作品においては、会話文と地の文の境界がはっきりしない傾向にある。両者の境界の曖昧性は、前掲（三）の他、次のような例からも知られる。

（二四）　［八の宮は］かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほどおこなひたまふ。［・・・］［薫は］忍びたまへど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男、なまかたくなしき出で来たり。（宿直人）「しかじかなん籠もりおはします。御消息をこそ聞こえさせめ」と申す。

（源、橋姫、五、一三七頁）

（二五）　母上［四の君を］いみじと見たてまつりたまひて、「かくなん」と［右大臣に］聞こえたまふ。

（と、巻三、二六八頁）

（二四）（二五）においては、会話文中の指示詞（傍線部）が、地の文の内容（波線部）を承けている。作中人物である聞き手からすれば、このままでは何を言っているのかわからないので、話し手（こちらも作中人物）の発話そのものとは考えられない。[9] ここで注目されるのは、話し手の視点に忠実な直接話法と、引用者の視点が反映された間接話法の別である。（二四）（二五）の傍線部には、引用者である語り手の視点が入っているので、この会話文は間接話法のものと言える。

個々の現象を完全に網羅したわけではないが、間接話法の会話文は、会話文と地の文の境界が不明確な場合にのみ見出されると考えられる。

六　結論

本稿では、会話文の前後の形式を調査・分析し（四節）、地の文との境界について考察した（五節）。その結果、会話文と地の文の境界に関して言えば、中古和文には次の二つの類型があるということが明らかになった。

（二六）　a　境界が明確な類型（直接話法型）

［地の文］［会話文］［地の文］［会話文］…

b　境界が不明確な類型（間接話法型？）

［［会話文］地の文］［［会話文］地の文］…

（二六a）の会話文は、直接話法のものと考えられる。一方、（二六b）の会話文には、直接話法のものと間接話法のものが混在しているようである（二四）（二五）参照）。

注

（1）工藤（一九九五）の用語で言えば、「はなしあいのテクスト」と「かたりのテクスト」。

（2）地の文は全て語りと見てよいが、会話文が常に会話であるとは限らない。たとえば、次に挙げる会話文の例は、テクスト的には語りにあたる。

（イ）〔明石の入道の使者→尼君〕「この御文書きたまひて、三日といふになむ、かの絶えたる峰に移ろひたまひにし。［・・・］皆帰したまひて、僧一人、童二人なむ御供にはせたまふ。［・・・］年頃、おこなひの隙々に寄り臥しながらかき鳴らしたまひし琴の御琴、琵琶取り寄せたまひて、かい調べたまひつつ、仏に罷り申したまひてなむ、御堂に施入したまひし。［・・・］」など［・・・］

（源、若菜上、四、一一七頁）

（3）『新編日本古典文学全集』頭注：「絵に…似たるかな」を地の文とする説や、また「はるかに霞みわたりて…」以下を源氏の言葉とする説などがある。地の文から作中人物の会話文におのずから移行していく趣。これも物語文の特徴の一つ。

（4）遠藤（一九五三）、池田（二〇〇二）から、和歌と地の文の境界についても同様であることが知られる。

なお、会話文と地の文を（さらには和歌や心内話文も）意識的に区別する写本も存在する（本誌所収の加藤昌嘉氏の論攷を参照）。

（5）調査範囲は次のとおり。必ずしも全巻調査ではないが、このことが原因で、本稿の主張が覆ることはないと考える。

『竹取』…全編　　『うつほ』…藤原の君～吹上下

『落窪』…全巻　　『源氏』…桐壺～少女

『和泉式部』…全編　　『寝覚』…全巻

『とりかへ』…巻三、四

なお、底本の書写年代は一貫しておらず、『竹取』などは近世以降の写本である。書写年代の言語感覚が反映されている可能性もあるが（これについても、本誌所収の加藤昌嘉氏の論攷を参照）、推定年代の方を重視した。

（6）この時代、ク語法はすでに生産性を失っているため、「言はく」などの例は求めるべくもない。ただし、同様の表現は、「言ふやう」や準体節で代用可能であるから、通達名詞の不使用とク語法の衰微は関係しない。

（7）なお、『竹取』『うつほ』以外の作品においては、会話文の後に通達動詞をとる例が大半を占める。具体的な数値は次のとおり。

（ロ）

	会話文	後に通達	
竹取	一九三	一四三	（七四％強）
うつほ	八三二	三三九	（四一％弱）
落窪	一一四一	七二一	（六三％強）
和泉式部	八〇	六一	（七六％強）
源氏	一二〇四	八三五	（六九％強）
寝覚	五九四	四九〇	（八二％強）

とりかへ　二四一　一五二（六三％強）

（8）会話文を承けるのは、必ずしも通達動詞に限らないので（「…と泣く」「…と恥ぢらふ」など）、対象を動詞一般に広げた。

（9）次の例におけるソ・サ系指示詞は、実際の発話においては、別の形式であった可能性がある。

（八）昼つ方、小さき童、緑の薄様なる包文のおほきやかなるに、小さき髭篦を小松につけたる、また、すくすくしき立文とりそへて、奥なく走り参る、女君に奉れば、（宮→童・女君）「それはいづくよりぞ」とのたまふ。（源、浮舟、六、一〇九頁）

（八）の「それ」は、聞き手領域を指示しているとも、先行文脈と照応しているとも考えられる（ちなみに、ソ・サ系指示詞の主用法は文脈照応）。聞き手領域は、

（二）畳紙の手習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。「これはいかなるものどもぞ」と御心驚かれて、（右大臣→尚侍の君）「かれは誰がぞ。気色異なるもののさまかな。「・・・」とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる。（源、賢木、二、一四五頁）

のように、カ・ア系指示詞によっても指示することができるので、（八）の「それ」が、実際の発話を反映しているとは言い切れない（この問題については、佐伯梅友『源氏物語講読』上・中・下（武蔵野書院）が指摘している）。

出典

『竹取物語』（九世紀末〜一〇世紀初）…『新編日本古典文学全集8　竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』、小学館、一九九四年、片桐洋一（校注）、底本＝古活字十行甲本

『うつほ物語』（一〇世紀後）…『新編日本古典文学全集14〜16　うつほ物語』、小学館、一九九九〜二〇〇二年、中野幸一（校注）、底本＝尊経閣文庫蔵前田家各筆本

『落窪物語』（一〇世紀後）…『新日本古典文学大系18　落窪物語　住吉物語』、岩波書店、一九八九年、藤井貞和・稲賀敬一（校注）、底本＝九条家本

『源氏物語』（一一世紀初）…『新編日本古典文学全集20〜25　源氏物語』、小学館、一九九四〜九八年、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注）、底本＝伝明融筆臨模本・大島本・伝定家筆本

『和泉式部日記』（一一世紀初）…『新編日本古典文学全集26　和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』、小学館、一九九四年、藤岡忠美（校注）、底本＝宮内庁書陵部蔵本

『夜の寝覚』（一一世紀中）…『新編日本古典文学全集28　夜の寝覚』、小学館、一九九六年、鈴木一雄（校注）、底本＝松平文庫蔵本

『とりかへばや物語』（一二世紀末？）…『新日本古典文学大系26　堤中納言物語　とりかへばや物語』、岩波書店、一九九二年、今井源衛・森下純昭・辛島正雄（校注）、底本＝陽明文庫本

『岷江入楚』（一五九八）…『岷江入楚　自一桐壺至十一花散里』、武蔵野書院、一九八四年、中野幸一（編）、底本＝国会図書館蔵本（寛永二〇年飛鳥井雅章筆本、旧三条西家蔵本）

参考文献

池田和臣（二〇〇二）「源氏物語の文体形成――仮名消息と仮名文の表記――」、『国語と国文学』七九・二、一〜一七頁、東京大学

井島正博（二〇〇五）「中古和文の地の文と会話文」、『築島裕博士傘寿記念　国語学論集』、二三〇〜四六頁、汲古書院

遠藤嘉基（一九五三）「新講話和泉式部物語3」、『国語国文』二二・

二、六〇〜六四頁、京都大学
加藤昌嘉（二〇〇六）「「と」の気脈――平安和文における、発話／地／心内の境――」、『詞林』四〇、一四〜二八頁、大阪大学古代中世文学研究会
――（二〇〇七）「句読を切る。本文を改める。」、伊井春樹（監修）・加藤昌嘉（編）『講座源氏物語研究8　源氏物語のことばと表現』、一二六〜五〇頁、おうふう
工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンス体系とテクスト――現代日本語の時間の表現――』、ひつじ書房
黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太（二〇〇八）「中古王朝物語の会話文――地の文との境界をめぐって――」、『詞林』四三、一〜七頁、大阪大学古代中世文学研究会
阪倉篤義（一九五九）「物語の文章――会話文による考察」、『人文』六、京都大学［再録…阪倉篤義（一九七五）、六六〜八四頁］
――（一九七五）『文章と表現』、角川書店
三谷邦明・東原伸明（編）（一九九一）『日本文学研究資料新集5　源氏物語　語りと表現』、有精堂出版
宮坂和江（一九五五）「会話文と地の文」、『国文学　解釈と鑑賞』二〇・六、一四〜一七頁、至文堂
Dahl, Östen. (1985). *Tense and aspect systems*. Oxford: Basil Blackwell.

（くろき・くにひこ　本学大学院博士後期課程）
（ふじもと・まりこ　本学大学院博士後期課程）
（きよた・あきひろ　本学大学院博士後期課程）
（もり・ゆうた　本学大学院博士前期課程）